

能界展望(平成十五年・十六年)

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

163

(終了ページ / End Page)

181

(発行年 / Year)

2006-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002850>

能界展望 (平成十五年・十六年)

西野 春雄

遅ればせながら、平成十五年(二〇〇三)と十六年(二〇〇四)の二年分を一括して展望する。今となつては展望というよりも年鑑のように記録することに意義を見いだしての執筆である。至らぬ点が多いことは十分承知しているが、ともかく記録を中心に進めることにしたい。

ここ数年の能楽界の動向は「能楽タイムズ」「新能楽ジャーナル」「能楽の友」「DEN」などのジャーナル誌、「観世」「宝生」「金春月報」「橘香」「鎮仙」「おもて」「大島草紙」などの流儀や会派の雑誌やパンフレット、そして一般の新聞等の報道から伺うことができる。本稿も、主としてこれらの報道記事によりつつ、誠に狭い見聞で、しかも関東に傾きがちで恐縮ながら、能界の状況を記録することを心掛け、主な出来事や顕著な現象の概要を項目別に略述する。

概観

特筆すべき事は、平成十五年九月に国立能楽堂が開場二十周年を迎えたことであろう。記念の特別公演や特別展示が催された。平成十六年七月、日本能楽会会員の第十二次増員が行われ、あらたに五十七名が新会員となった。特に注目され

たのは、一般の新聞も報じていたが、初めて女流能楽師が認定されたことである。長い道のりであった。

能界活動に目をやれば、各流各派の定期的な公演のほか、記念の催しや個人の会・同人会も多く、催会の数の上では盛況を呈しているように見える。しかし、忙しすぎるのも問題で、ともすると惰性に流れる危険性も潜んでいる。また、これまで、しばしば指摘されていることであるが、若い人材が稽古に充てる十分な時間が確保されているのかどうかも心配である。流儀あげての別会といいつつ、年々見所が寂しくなる会もあつた。拠つて立つ流儀の月並能が寂しいのは何ともやり切れない。演者の側に危機感があるのだろうか。いくら自分の公演が盛況でも、これでは先行きが案じられる。

いったい、こうした状況の原因はどこにあるのか。世代交代や、観能人口や謡人口の減少もあるのだろうか。見所のマナーの悪さも目立つ。携帯電話の心ない着信音や、紙袋か何かの迷惑雑音。公德心もあらばこそ。傍若無人の振舞が目にあまる。

一方、近年の顕著な傾向として、能・狂言の入門・啓蒙書の出版が相次いでいることも指摘される。戦後以降の能楽図

書出版史を概観しても、こんなに出版が盛んな年もないのではないだろうか。ビジュアルで比較的軽い本が迎えられる現代の出版状況を反映しているのかもしれない。能楽愛好者の裾野の拡大につながるならば慶賀すべきことだが、それに引き換え、各流とも謡本が売れなくなつて久しいという。謡人口そのものが減少していることは確実であるが、それだけではあるまい。何に起因するのだろうか。

ところで、慶事も続いた。平成十五年六月、京都御所近くに金剛能楽堂が落成し、新たな拠点が築かれたことである。平成十五年六月二十日付で、シテ方宝生流の三川泉氏と小鼓方大倉流の北村治氏のお二人が、重要無形文化財保持者いわゆる人間国宝に認定され、十四年度日本芸術院賞には、シテ方喜多流の友枝昭世氏と歌人の馬場あき子氏が受賞された。十五年十二月一日、日本芸術院は九人の新会員を発表し、シテ方喜多流の粟谷菊生氏と歌人の馬場あき子氏が選ばれた。他方、訃報もあつた。梅若恭行氏、橋岡久馬氏、松本恵雄氏、金井章氏、喜多節世氏、大藏彌右衛門氏、一噌幸政氏といった戦後の能界を支えて来られた方々を見送るとともに、野村万之丞氏のようにエネルギーシユにアジア各地に東奔西走の活躍を見せていた役者の悲報にも接した。詳しくは物故者の欄を読んでいただきたい。

国立能楽堂の二十年

【企画公演】

平成十五年九月、国立能楽堂が開場二十周年を迎えた。記念の特別企画公演では、瀬戸内寂聴作の新作能「蛇」が上演され話題になったが、開場以来の国立能楽堂の軌跡をたどるとき、近年の企画や活動は、草創期にあつた「初めて国民に開かれた国立の能楽堂である」という使命感も、高い志も、どこかに置き忘れていくように思われてならない。

政治も文化も民度も、すべて世の中全体に大衆迎合主義がまかり通る現代の風潮そのままに、低俗な、気品を忘れたかのような企画が目につく。それを象徴するのが新作能「蛇」の企画であつたと思う。著名な作家による露骨な愛欲描写に重きを置いた能本、有名な画家による奇抜なポスター、女面にさらに面の一部を付着させる新演出など、鬼面人を驚かす、マスクミ受けをねらつた話題作りが先行した公演のように思う。現在の能楽を支えているのは一般市民であり、何よりも一般市民が能楽堂に足を運ばないと先細りになるので、観客動員を重視するのは当然のことであるが、近年は、中身よりも外見を重視し、本質を忘れた、現象ばかりを追いかけた公演が多いような気がする。今回の特別企画公演も、悪しき大衆化路線に舵を取り、総じて易きに流れた、一部のミーハー趣味にジャックされた公演ではなかったか。これまで、携わってきた関係者の努力によって、国立能楽堂ならではの、かなり質の高い舞台を実現してきたように思われるが、二十年目を迎えた今日の状況は、一見、盛況に見えても、相当の危険と背中合わせになっていることを肝に銘じるべきである。

う。国立能楽堂には、もつと王道を歩んでいただきたい。

また、細かいことながら、パンフレットに掲載されている上演詞章の掲載の仕方も問題である。開場以来、上演曲目の詞章を掲載して鑑賞の一助となっているが、初期のころは、横道萬里雄氏の、いわゆる小段理論によって分析した詞章を載せ、楽劇としての能の台本構造が理解できるよう配慮されていたのであったが、いつのまにか小段分析が歪められ、そのうち廃止され、今では中途半端な形の上演詞章が載るようになった。初めて能に触れる観客や見始めた観客のことを考えるならば、現在の形式は改めるべきであろう。何も小段理論が万能というのではないが、謡曲の構造が誤解されるような現在の不完全な形式は一考を要する。小段理論によらない適切な形を工夫するか、それが無理なら原点に戻るべきであろう。

今から約百年前の明治43年、観世流謡曲同志研究会(代表渡辺益利)が活字時代の到来に合わせて「観世流謡曲錦囊」という活版の謡本を編輯・発行したことがあるが、その心意気を見習いたいものだ。

【能楽三役養成事業】

国立能楽堂の重要な使命に後継者の養成、なかでも能楽三役の要請事業がある。昭和59年に開始した養成事業は、平成16年7月で二十周年を迎えた。この間、講師の先生方の努力と研修生諸君の精進によって、能楽協会の会員となり、舞台

に出演する者も育っている。現在、第五期生までが研修を修了し、第六期生(3名。笛方森田流1・小鼓方幸流1・太鼓方観世流1)が専門研修課程で学び、第七期生5名。ワキ方福王流2・小鼓方大倉流2・大鼓方葛野流1)が基礎研修課程で学んでいる。(なお、平成17年度からは大きく変わり、対象をシテ方と三役の子弟とし、研修修了生のさらなる芸芸の向上を目的として研究課程が設置されたという。)

国立能楽堂では、実技や講義のほか、年三回研修舞台で行われる稽古会や、本舞台での発表会を開催している。研修生たちはまた毎年夏の「東西合同研究発表会」に京都・大阪の養成会生徒たちと共演するなど、積極的に舞台経験を積んでいる。さらに、毎年、東京・京都・大阪の三都市で開催する修了生等による「若手能」公演も実施しているが、平成16年度から、新たにシテ方をも含めた各流各家の子弟、門下生らと共に技芸を披露する機会を設け、「能楽研鑽会」を企画し開催している。これには第一線で活躍中の演者も、指導あるいは補導出演の立場から参加している。

それにしても焦眉の急である三役の養成事業は、一朝一夕には成就できない。しかし、同時に一瞬の遅滞停滞も許されない。開始後二十年余を経た今日、国立能楽堂および関係者の努力に敬意を表するとともに、その足跡を検証し、関係者の創意工夫によって障害弊害を取り除いてほしい。そして、創設の精神を忘れず、当初の目的が十分に達成されるよう、国立能楽堂および関係者の努力に期待したい。

【特別展示】

国立能楽堂の使命の一つに、能楽関係資料の収集と調査研究活動がある。六百年の歴史を有する貴重な無形文化財である能楽。そのたぐい稀なわざの歴史を正しく理解し、後世に伝えるためには、能楽と共に歩んできた数々の有形の文化財を収集することが不可欠であるからだ。そして、収集と調査研究の成果を実際の舞台に反映させることもまた大切な仕事である。能面や能装束および絵画や文献資料などの地道な収集活動は、直ちに目に見えるものではないが、平成15年10月に独立行政法人として新たに発出したことも関係しているのであろうか、ここ数年、関係者の努力によってかなり充実しているように思われる。開場20周年記念資料展示も、興味深いテーマと充実した展示と図録など、見応えがあった。

文献・絵画を中心に、それぞれの資料の時代的背景や能の変遷への理解を深め、併せて国立能楽堂における資料収集の理念と使命を示した〈収蔵資料展〉(平成15年10月11日～11月8日)、江戸時代における能楽の最大の庇護者かつ監護者であった徳川家の能楽に焦点を絞り、「徳川將軍自演の記録と、御三家・御三卿の能楽資料との関わりを通し、徳川家のパトロネージの一端」を窺い「文化の継承のために施された重層的な支援のあり方」の理解を深めた〈徳川家の能〉(平成16年1月16日～2月14日)は、ともに貴重かつ興味深い資料が厳選展示されていた。

一方、通常の入門展示も定着しており、なかでも〈狂言装

束と狂言面〉(平成16年3月9日～26日)は地味ながら狂言の諸譚の精神が感じられた、ほほえましい展示であった。

金剛能楽堂の落成

長い間親しまれた京都室町を離れ、京都御所中立売御門の西に建設が進められていた金剛能楽堂が落成し、平成15年6月18日、舞台披きと祝賀能が催された。あいにくの雨模様であったが、記念式典は常陸宮ご夫妻のご臨席のもと午後一時から行われ、(財)金剛能楽堂財団建設部会長吉村彰彦氏の経過報告、常陸宮様のお言葉、来賓の祝辞、感謝状の贈呈、金剛永謹金剛流26世宗家の謝辞が続き、午後2時から祝賀能が催された。金剛宗家の〈翁〉(千歳、茂山正邦、三番三、茂山千五郎)、仕舞〈高砂〉金春安明、〈羽衣〉宝生英照、〈宮船〉喜多六平太、小舞〈海道下り〉茂山千作、仕舞〈笠之段〉梅若六郎、〈東北〉片山九郎右衛門、〈狸々〉金剛龍護、舞囃子〈嵐山〉観世清和氏の各宗家ほかの出演で新能楽堂の落成を祝った。舞台は旧能楽堂の舞台組を使用し、橋掛りやその他の部分は新しく作られた。所在地は、京都市上京区烏丸通一条下ル。観客席は、定席400、補助40。筆者も当日参列したが、御所の近くで周囲の環境も良く、能楽堂の外観はもとより内部も見やすく、心地よく感じられた。関係者の努力に敬意を表すると共に、金剛流の新しい拠点の建設を契機として、よりいっその発展を祈るものである。

新作能・復曲能の動き

ここ数年に続き平成15年・16年も新作能や新作狂言の上演や復曲能があいついだ。ここでは新作能と復曲能に限定して記録することをお断りしたい。

【新作能】

- ①新作能「五輪書・武蔵伝」
大江捷也原作、狩野琇鵬監修。塩津哲生主演。平成15年4月再演。国立能楽堂。初演は前年10月、熊本城特設舞台。
- ②新作能「一石仙人」
多田富雄作詞、津村禮次郎節付。津村禮次郎主演。15年5月初演。横浜能楽堂。横道萬里雄の能評が「朝日新聞」平成15年5月28日夕刊に、金子直樹の評が「能楽タイムズ」同年7月号に掲載。
- ③新作能「原子雲」
宇高通成作・演出、金剛永謙監修。宇高通成主演。15年8月初演。国立能楽堂。
- ④新作能「待月(つきまほ)」
松田正隆原作、味方玄脚色・節付。味方玄主演。15年10月初演。京都・観世会館。
- ⑤新作能「山鳥」
山崎楽堂原作、関根祥六節付、山本東次郎間狂言作詞。関根祥六主演。15年10月初演。横浜能楽堂。横浜能楽堂企画公演「九十年目の新作能」。大正4年に創作されるが、未上演のままだった「おろの鏡」を改題して初演。同日は山本東次郎の新作狂言「桂の短冊」も上演。なお、この公演に用いる新作能面・狂言面が「能・狂言面大賞二〇〇三」として一般募集、入選作が使用されたことも話題になった。
- ⑥現代能「始皇帝」テキストリーディングの試み
那珂太郎作、能楽座節付・作調、岡本章演出。観世榮夫・梅若六郎・宝生閑・山本東次郎ら出演。15年12月初演。国立能楽堂。
- ⑦新作能「龍馬」
宇高通成作詞・節付。宇高通成主演。15年12月初演。金剛能楽堂。
- ⑧新作能「她(くちなわ)」
瀬戸内寂聴作詞、山本東次郎監修、梅若六郎節付・演出。梅若六郎・大槻文藏主演。15年12月初演。国立能楽堂開場20周年記念特別公演。
- ⑨新作能「博多山笠」
水原紫苑脚本、梅若六郎総合監修。梅若六郎主演。平成16年9月初演。
- ⑩新作能「利休」
深瀬サキ作詞、野村四郎節付、笠井賢一演出、観世清和主演。16年11月初演。静岡グランシップ。「世界お茶祭り二〇〇四」。
- ⑪新作能「小野浮舟」
馬場あき子作、梅若六郎節付・演出。津村聡子主演。16年

12月初演。横浜能楽堂。横浜能楽堂・りゅうとびあ共同企画公演「女による女のための女の能」。

⑫新作能「能・ハムレット」

上田邦義作詞、八田達弥地謡節付、観世榮夫・梅若万三郎・上田邦義演出。伊藤嘉章・長谷川晴彦・野村万作ほかの出演。16年12月初演。東京・お茶の水の日本大学カザルスホール。日本大学学術研究助成公演。

⑬新作能「照手」

松山隆雄作・節付・演出。松山隆雄・松山隆之ほかの出演。16年12月初演。さがみはら能。グリーンホール相模大野。

⑭新作能「鷹の泉・呪掛り」

イエーツ原作、横道万里雄能作・演出。友枝昭世・観世清和・関根祥人・一噌幸弘・大倉源次郎・柿原崇志・金春国和・野村四郎ほかの出演。16年12月上演。国立能楽堂。能楽観世座公演。主催(財)観世文庫、協力「鷹の泉」を見る会。「鷹姫」の原曲で、横道万里雄の米寿の祝意を込める。筆者は右のうち、②「二石仙人」⑤「山鳥」⑥「始皇帝」⑧「蛇」⑨「小野浮舟」⑩「能・ハムレット」⑭「鷹の泉・呪掛り」を見る事ができた。それぞれの努力を多としつつ、違和感を覚える公演もあり、あらためて「能とは何か」を考えさせられた。

【復曲能】

①平成15年度第二回(財)観世文庫自主公演。復曲「箱崎」。

観世清和・森常好・山本東次郎・一噌隆之・飯田清一・白坂保行・観世元伯・武田宗和ほかの出演。平成15年7月31日。観世能楽堂。確実な世阿弥作の女神の能の復曲。8月10日、箱崎宮でも上演し、NHK・TVで放映した。

②金春円満井会特別公演。復曲能「橘」四〇〇周年。

金春安明・中村彌三郎・大藏彌太郎・一噌庸二・大倉源次郎・大倉榮太郎・観世元伯・本田光洋ほかの出演。平成16年12月9日。国立能楽堂。豊臣秀吉の七回忌にあたる慶長九年(一六〇〇)の豊国神社祭礼では、大和猿楽四座が新作を競い、金春座は「橘」を上演したが、それからちょうど四百年に当たるのを記念して復曲した。

③国立能楽堂企画公演「箱崎」。

観世清和・森常好ほかの出演。平成16年12月23日。国立能楽堂。

右の復曲能では、現行曲と見まがうほどの仕上がりで、それぞれの作品に注いだ関係者の尽力に敬意を表するとともに、復曲能も、一回限りで終わるのではなく、再演・三演と上演を重ねていつてもらいたいと思う。その意味で、国立能楽堂の企画公演に「再演の夕べ」というのがあるのは心強い。鑑賞に耐え評価できる新作能や復曲能は、何よりも磨かれ熟成される時間が必要であるからだ。これまでの新作や復曲が今ひとつ定着しない要因のひとつは、ほとんどがエチュードばかりで、タブローに仕上げていく時間的・精神的(かつ経済的)余裕がないからである。より洗練された作品が生まれる

ことを期待したい。

海外との交流・海外公演など

ここ数年、海外公演も頻繁に行われている。二〇〇一年、ユネスコによる「世界無形遺産の傑作の宣言」がなされて以来、いよいよ活発になったようである。訪問する国や都市によつて事情もいろいろあるだろうが、誤まつたおもんばかりや妥協は捨て、また過密なスケジュールや過度の負担なども返上して(このためには事前の緻密な打ち合わせが絶対不可欠)、自分たちが信じているものを、最良の形で、彼の国の人々に届けてほしいものである。いつまでも(土蜘蛛(土蜘蛛)ではあるまい。今後の海外公演のあるべき姿を考える上での一助ともなることを願い、次に記述するが、もとより遺漏もある。お気づきの方はぜひご一報いただきたい。

〔平成15年〕

①サンクトペテルブルグ建都三百周年祝賀「梅若六郎能楽公演」

5月27・28日。ロシア、サンクトペテルブルグ。スモリーヌイ修道院。梅若六郎・梅若晋矢・宝生閑・山本則重・松田弘之・大倉源次郎・亀井広忠・田中達ほか。狂言(瓜盗人)能(土蜘蛛)囃子(獅子)。

②日本の舞台芸術 ジャパンニイズ・イン・ロシア

7月1・2日。ロシア、モスクワ。マールイ劇場。観世榮夫・観世鏡之丞・宝生閑・大野誠・林光寿・佃良勝ほか。能(景

清)。

③パキスタン公演

8月12〜15日。パキスタン、カラチ。カラチ市FTCC公会堂。當山孝道・小林与志郎・吉川正治・住駒充彦・内田柳幸・大川典良ほか。能(羽衣)舞囃子(八島)仕舞(嵐山・鶴之段)。

④日越友好樹立30周年記念「新能」公演 in Vietnam

8月28〜9月9日。ベトナム、ハノイ、フエ。財団法人十四世六平太記念財団主催。大島政充・狩野瑤鵬・山本則直・帆足正規・大倉正之助ほか。能(船弁慶)黒塚(狂言(棒縛)(千鳥)仕舞(羽衣))。

⑤片山家能楽・京舞保存財団スイス・ドイツ公演

9月1日。5〜7日。スイス、チューリッヒ。リートベルグ博物館。ドイツ、ボン。ドイツ連邦共和国ボン州立美術館。片山九郎右衛門・片山清司・宝生欣哉・野村与十郎・竹市学・吉阪一郎・河村大・前川光長ほか(翁)能(天鼓)(羽衣)(天鼓)(土蜘蛛)半能(敦盛)舞囃子(石橋)。

⑥ドイツ能公演

10月15日。ドイツ、デュッセルドルフ。演劇博物館。ツォンズ、ツォンズ博物館。本田光洋ほか。仕舞(八島)(羽衣)解説・着付け、実演(八島)(羽衣)。質疑。

⑦パイプオルガンと謡のコンサート

12月12日。フランス、パリ。サントウスターシユ教会。ジャン・ギュー、関根勝。バッハ、ヴィヴァルディの小曲、謡(葵上)(井筒)(屋島)(羽衣)(土蜘蛛)のキリ。

〔平成16年〕

①デモンストレーション公演

1月23日、2月1・2日、6日。アメリカ、ボストン、サフォーク大学ウォルシュシア。パツファロー、ニューヨーク州立パツファロー校ドラマシアター、アイリッシュユークラシカルシアター。フレドニア、フレドニア・オペラハウス。八田達弥・深野新次郎・安田登。能羽衣(葵上)。

②空中庭園「能・狂言公演」

2月22・28日。フランス、パリ。パリ日本文化会館。観世榮夫・梅若晋矢・野村万作・野村萬斎ほか。(翁)狂言(靉狼(川上)・蝸牛)。現代能(内濠十二景あるいは二重の影)装束付舞囃子(長谷寺の牡丹)、現代狂言(鏡冠者)。

③文化庁アーツプラン 2003 能・狂言 ニューヨーク・ワシントン公演

3月18・20、21日。アメリカ、ニューヨーク、ジャバンスサエティー舞台。ワシントンDC。片山九郎右衛門・浅見真州・大槻文蔵・宝生閑・茂山千作・藤田六郎兵衛・荒木賀光・佃良勝・三島元太郎ほか。能(恋重荷)素囃子(獅子)狂言(寝音曲)。

④白翔会ロシア能公演

3月23・24日、27・28日。ロシア、モスクワ、ボリシヨイ劇場。サンクトペテルブルグ、マリインスキー劇場。坂井音重・観世恭秀・福王茂十郎・藤田次郎・鶴澤速雄・柿原崇志・助川治・山本東次郎ほか。能(船弁慶・重前後之替)(隅田川)居囃子

(石橋・師資十二段之式) 狂言(二人大名)(二人袴)仕舞三番。

⑤オランダ・ベルギー公演

4月10日・19日。オランダ、アイントフォオーへ、デン・ハーグ、ロッテルダム、アムステルフェーン、ブレダ、デン・ボツシユ。ベルギー、アントワープ。水島忠修・観世喜正・野口能弘・深田博治・竹市学・古賀裕己・高野彰・桜井均ほか。能(葵上)舞囃子(高砂)狂言(柿山伏)。

⑥「王様と恐竜」パリ公演

4月27・29日。フランス、パリ、エスパスカルダン。茂山千作・茂山千之丞ほか。スーパードラマ狂言(王様と恐竜)。

⑦能舞台

7月25日・8月15日。スウェーデン、ストックホルム。コンストファック美術大学。津村禮次郎。

⑧日本能楽天津訪問団天津六百周年祝賀公演

10月25日。中国、天津。天津戲劇博物館内京劇舞台。関根祥六・関根祥人・宝生欣哉・亀井広忠ほか。仕舞(高砂)舞囃子(熊坂)能(羽衣)。

⑨文化庁アーツプラン海外公演(第二回)

12月2日・16日。アメリカ、シカゴ、サンパウロ、ボストン、ニューヨーク、アトランタ、ニューオーリンズ。梅若六郎・大槻文蔵・福王茂十郎・山本則俊ほか。半能(望月)狂言(釣狐)能(土蜘蛛)。

⑩日印伝統芸能交流プロジェクト 2004

12月27日。インド、ドリバンドラム。梅若紀長・村瀬提・栗

林祐輔・荒木健作・大倉栄太郎・梶谷英樹ほか。能〔羽衣〕。

筆者は、たまたま海外調査と学術講演のため訪れていたボンとパリで、平成15年の⑤片山家能楽・京舞保存財団のボン公演と、平成16年の②空中庭園「能・狂言バリ公演」を見る事ができた。どちらも前評判も高く、充実した公演であった。ボンでの公演は能舞台を九州延岡から運び、簡素ながら縦に深い能舞台の構造に近く、見所も見やすく、設営にも工夫が見られた。舞台空間の構築が重要な鍵となることを実感した。

継承

幸流小鼓方宗家預りの幸正悟氏は、平成15年8月、幸流職分会の同意と各流宗家の承認を得て、第十八世宗家を継承された。

榮譽・受賞など

〔平成15年〕

〈春の褒賞・叙勲〉 4月29日付

◎紫綬褒章 大鼓方高安流 安福建雄氏。

〈秋の褒賞・叙勲〉 11月3日付

◎紫綬褒章 ワキ方福王流 福王茂十郎氏。

◎旭日小綬章 狂言方大藏流 茂山忠三郎氏。

旭日双光章 笛方森田流 野口傳之輔氏。

◎〔重要無形文化財個人指定保持者(人間国宝)〕

6月20日付けでシテ方宝生流の三川泉氏と小鼓方大倉流の北村治氏が認定された。

◎芸術祭賞(平成14年度)優秀賞 シテ方観世流 観世喜之氏。能「卒都婆小町」の優れた演技に対して。

◎芸術選奨文部科学大臣新人賞 狂言方相泉流野村萬斎氏。

「萬斎、敦を語り読む」狂言「髭櫓」の優れた演技に対して。

◎日本芸術院賞(平成14年度)

シテ方喜多流 友枝昭世氏。「喜多流のみならず広く能楽界を代表して、伝統芸能「能楽」の存在を世に示す数々の優れた舞台を創り上げてきたその功績は顕著である」。

歌人 馬場あき子氏。「広く現代短歌界の指導的立場の一人として確固たる地位を占めるに至った歌作並びに活発な評論活動などによる伝統文化に寄与したその業績は顕著である」。

◎芸術院新会員

シテ方喜多流の粟谷菊生氏と歌人の馬場あき子氏。12月1日、日本芸術院は九人の新会員を発表、会員数は一二人になった。

◎京都市芸術新人賞 シテ方観世流、片山清司氏。

各地での能会への出演のほか、新能・ホール能のプロデュース、小・中学校での能楽教室の開催、能の絵本の製作など、多岐にわたる普及活動に対して。

◎大阪市民表彰文化功労賞 笛方森田流 野口傳之輔氏。

「微妙な音程差を活かして味わいのある旋律を奏で、その音色は深く、静かでありながら力強さを感じさせ、希有な笛方として各流派から引く手数多で、重要な役割を果たしている」。

◎神戸市民文化活動功労賞

神戸湊川神社神能殿事務長 馳川慶二氏。

「長年にわたる、ひたむきな活動」に対して。

◎第三十七回仏教伝道文化賞 横道萬里雄氏。

「東大寺修二会観音悔過」「口唱歌大系」製作など、仏教音楽研究の成果が高く評価された。

◎第25回観世寿夫記念法政大学能楽賞

狂言方大藏流 茂山忠三郎氏。

シテ方観世流 野村四郎氏。(本誌第29号彙報欄参照)

◎第15回催花賞 横浜能楽堂(代表・山崎有一郎氏)。

(本誌第29号彙報欄参照)

〔平成16年〕

〈春の褒賞・叙勲〉 4月29日付

◎紫綬褒章 大鼓方葛野流 亀井忠雄氏。

◎旭日双光章 小鼓方観世流 観世豊純氏。

〈秋の褒賞・叙勲〉 11月3日付

◎旭日小綬章 シテ方宝生流 近藤乾之助氏。

◎芸術祭賞(平成15年度)新人賞 シテ方観世流 片山清司氏。

「片山清司能の会」における能「天鼓」の演技に対して。

◎第25回松尾芸能賞特別賞 狂言方和泉流野村又三郎氏。

「狂言和泉流・野村派の当主として長年にわたり研鑽を重ね、名古屋を中心に精力的に活動。平成十五年「やるまい会」東京公演で齢八十にして自家の幻の狂言「狸腹鼓」を七十数年ぶりに復活初演。その洒脱で自在な表現で観客を魅了した」。

◎大阪文化祭奨励賞 狂言方大藏流 善竹隆司氏。

「初世善竹忠一郎十七回忌追善・善竹狂言会」における「首引」の鎮西ゆかりの者の演技、弟・隆平との「善竹兄弟狂言会」の主催等、意欲的な取り組みに対して。

◎第8回ビクター財団賞奨励賞 大鼓方葛野流の亀井広忠氏。能楽界からは初の受賞。若手囃子方としての抜群の実績、また近年の伝統芸能のコラボレーション、新作能の作調等の新しい試みに対して。受賞記念のCDが制作・発売された。

◎サンクトペテルブルク建都三百周年記念メダル

シテ方観世流の坂井音重氏。

「ロシアにおける日本文化フェスティバル・フィナーレ公演」として3月23・24、27・28日に行われた能公演の功績に対して。

◎第20回名古屋市文化新興事業団芸術創造賞

狂言方和泉流、野村小三郎氏。

狂言「なりの座」の結成に参加、番外曲の復曲、異ジャンルとの競演等、名古屋市の芸術文化の向上に寄与したとして。

◎文部科学大臣表彰 シテ方観世流、吉井順一氏。

神戸観世会理事長、能楽協会神戸支部長、同支部相談役等を歴任、地域の文化向上に尽くした永年の功績に対して。

◎山口県鷺流狂言保存会五十周年記念にける感謝状

能楽研究者、小林 貴氏。

野田神社能楽堂で行われ上記公演に先立ち、永年にわたり鷺流狂言の調査に携わり同保存会を支援してきた功績に對して。

◎文化庁長官表彰 横浜能楽堂館長、山崎有一郎氏。

「永年にわたり、能楽の研究・評論を通じて斯界の向上・発展に尽力してきた。また、斬新なアイデアによる能楽堂の運営は、能楽の新たな可能性を拓き、斯界の発展に貢献している」。

◎第26回観世寿夫記念法政大学能楽賞

能楽研究者 小林 貴氏。

狂言方大藏流 山本則直氏。(別記彙報参照)

◎第16回催花賞 能楽タイムズ(代表・丸岡圭一氏)。

(別記彙報参照)

日本能楽会第十二次認定

文化審議会は、平成16年7月16日、重要無形文化財「能楽」総合指定保持者に、新たに六十七名を認定するよう答申し、同保持者で構成されている日本能楽会は、定時総会において新会員を追加認定し、8月10日、国立能楽堂で「社団法人日本能楽会新会員披露記念会」が行われた。

今回、特筆されるのは、初めて女性の能楽師が認定されたことである。戦前から女流能楽師のバイオニアとして、様々の差別や幾多の困難に遭遇しながらも、粘り強く精進を重ね、乗り越え克服してこられた女流能楽師を、能界も迎え入れ、

近年は女流の活躍もめざましい。たとえば、一九九八年度東京女性財団賞を受賞したシテ方観世流の山階敬子氏の例も記憶に新しい。受賞理由にもあるように「伝統的に男性によって伝承されてきた能楽の世界にあって、幼時から能一筋に励み、一九四八年に女性で初めて能楽師として認定され、九七年十月に国立能楽堂主催公演に女性として初めて出演を許され、シテを演じ、高い評価を受け」たのであった。このたび、ようやく十八名の方が日本能楽会会員に認定されたのである。女性の能楽師も含め、今回新たに認定された六十七名の方々の氏名は左のとおりである(敬称略)。

シテ方

(観世流 26名)

田邊哲久・笠田昭雄・片山清司・浦田保浩・杉浦豊彦・山崎正道・上田公威・小早川修・木原康之・松木千俊・中森貫太・長沼範夫・生二知哉・清水寛二・西村高夫・鶴澤久・今村宮子・佐伯紀久子・岩屋稚沙子・塩谷恵・谷村育子・寺岡佑子・藤井千鶴子・山階敬子・足立禮子・近藤幸江。

(金春流 5名)

富山禮子・鳥原春京・仙田理芳・高橋万紗・金春穂高。

(玉生流 9名)

高橋亘・佐藤耕司・稲川壽一・後藤裕子・内田芳子・影山三池子・倉本雅・竹内澄子・玉井博祐。

(金剛流 2名)

廣田泰能・松野洋樹。

〔喜多流 1名〕

長島茂。

ワキ方

〔福王流 1名〕

村瀬純。

笛方

〔一噌流 1名〕

一噌幸弘。

〔森田流 3名〕

貞光調義・森田保美・寺井宏明。

〔藤田流 1名〕

鹿取希世。

小鼓方

〔幸流 1名〕

成田達志。

〔大倉流 1名〕

清水皓祐。

〔観世流 1名〕

観世新九郎。

大鼓方

〔高安流 1名〕

白坂信行。

〔石井流 1名〕

河村眞之助。

〔大倉流 1名〕

山本哲也。

太鼓方

〔観世流 1名〕

井上敬介・観世元伯。

〔金春流 1名〕

吉谷潔。

狂盲方

〔大藏流 4名〕

丸石やすし・松本薫・網谷正美・茂山千三郎。

〔和泉流 5名〕

荒井亮吉・炭哲男・野村与十郎・野村萬齋・野村万禄。

思えば、昭和32年に国の重要無形文化財として「能楽」が総合指定された際にその保持者と認定された40名によって組織された同会は、40年の第一次増員の際に社団法人となり、以来、同会の会員がそのまま重要無形文化財「能楽」(総合指定)保持者と認定されることになった。そこでは、芸歴三十年以上などのいくつかの条件を設定し、各流宗家の推薦に基づいて日本能楽会審議会が人選し、総会で承認するかたちが採られている。これまでの増員の状況をまとめると次のごとくである。

第一次認定

一九五七年(昭和32年)

40名

第二次認定

一九六五年(昭和40年)

100名

第三次認定 一九六七年(昭和42年) 37名
 第四次認定 一九七二年(昭和47年) 45名
 第五次認定 一九七五年(昭和50年) 116名
 第六次認定 一九七八年(昭和53年) 64名
 第七次認定 一九八二年(昭和57年) 61名
 第八次認定 一九八六年(昭和61年) 64名
 第九次認定 一九九一年(平成3年) 70名
 第十次認定 一九九八年(平成10年) 57名
 第十一次認定 二〇〇一年(平成13年) 72名
 第十二次認定 二〇〇四年(平成16年) 67名

平成16年10月1日現在、のべ七九三名を数えることになる。

能楽協会・日本能楽会関係

◎能楽協会

〔役員構成〕(以下「会員名簿」平成16年版(二〇〇四年)社団法人能楽協会発行。平成15年11月14日現在による)

- 〔理事長〕 片山九郎右衛門
 〔常務理事〕 梅若六郎・坂井晋重・武田志房・寺井良雄・香川靖嗣・福王茂十郎・宝生 閑・藤田六郎兵衛・山本則俊
 〔理事〕 本田光洋・松野恭憲・杉 市和・亀井俊一・大倉源次郎・安福建雄・三島元太郎・野村万之丞
 〔理事・東京支部長〕 武田宗和
 〔理事・名古屋支部長〕 福井啓次郎

〔理事・北陸支部長〕 渡邊容之助

〔理事・京都支部長〕 片山慶次郎

〔常務理事・大阪支部長〕 大槻文藏

〔理事・神戸支部長〕 藤井完治

〔理事・九州支部長〕 鷹尾祥史

〔理事・事務局長〕 瀬山栄一

〔監事〕 粟谷菊生・丸岡圭一

〔会員数〕 一六五八名

〔シテ方〕 観世流 567 金春流 196 宝生流 266 金剛流 98

〔ワキ方〕 喜多流 60 小計 一一八七名

〔笛方〕 高安流 12 福王流 18 宝生流 27 小計 57名

〔小鼓方〕 一噌流 16 森田流 45 藤田流 4 小計 65名

〔大鼓方〕 幸流 29 幸清流 9 大倉流 18 観世流 7 小計 63名

〔太鼓方〕 葛野流 9 高安流 11 大倉流 4 石井流 8 小計 33名

〔狂言方〕 観世流 1 金春流 18 小計 32名

〔支部別〕 大藏流 149 和泉流 72 小計 221名

東京 677 名古屋 115 北陸 96 京都 176 大阪 217

神戸 60 九州 148 本部扱(支部に属さない会員) 58

◎日本能楽会

〔役員構成〕

〔会長〕 金春惣右衛門

〔常務理事〕 観世清和・野村四郎・金春安明・宝生英照・金

〔理事〕

剛永謹・喜多六平太・宝生 閑・茂山忠三郎
大槻文蔵・浅見真州・高橋 章・粟谷菊生・福
王茂十郎・一噌庸二・寺井久八郎・幸清次郎・
亀井忠雄・山本 孝・井上祐一
〔監事〕 高橋 汎・佐野 萌

物 故 者

〔平成15年〕

●助川龍夫氏

太鼓方観世流。1月7日、肺ガンのため逝去。享年79。大正13年、名古屋市に生まれる。観世元信、鬼頭八郎に師事。

初舞台は昭和30年、〈小鍛冶〉。その後〈乱〉〈望月〉〈石橋〉〈道成寺〉等を披露。能楽協会名古屋支部常議員等を歴任。日本能楽会会員(昭和53年以来)。〔能楽タイムズ〕平成15年5月号に計報記事。

●梅若恭行氏

シテ方観世流。1月20日未明、心不全のため逝去。享年85。大正6年10月6日、二代梅若実の三男として東京に生まれる。父および兄の五十五世梅若六郎に師事。昭和59年〈楡垣〉、平成11年〈関寺小町〉等を披露。昭和63年、勲五等双光旭日章および日本芸術院賞を受賞。平成4年、日本芸術院となる。海外公演にも数多く参加。能楽協合理事、梅若会副理事等を歴任する。日本能楽会会員(昭和40年以来)。〔能楽タイムズ〕平成15年2月号、〔観世〕同3月号に計報・追悼記事。

●柿原繁蔵氏

大鼓方高安流。1月29日、心不全のため福岡県大牟田市の病院で逝去。享年91。明治44年3月15日、福岡県に生まれる。安福春雄、宮原康寿に師事。〈石橋・大獅子〉〈乱〉〈道成寺〉等を披露。昭和31年から平成17年まで九州朝日五流能の実行委員として活躍。また福岡、佐賀県を中心に多くの後進を育成し、88歳で引退するまで地方から能楽界を支えた。昭和45年には渡欧能楽団に参加。平成2年、催花賞を受賞。日本能楽会会員(昭和50年以来)。〔能楽タイムズ〕平成15年3月号、〔観世〕同4月号に計報記事。

●松本恵雄氏

シテ方宝生流。2月5日、急性心不全のため逝去。享年87。大正4年10月7日、近代の名手・松本長の次男として東京に生まれる。十七世宝生九郎に師事。昭和11年〈鞍馬天狗〉の仕舞で初舞台、13年〈花月〉で初シテ。早稲田大学に入学するが、修業に専念するために中退。その後、〈道成寺〉〈石橋〉〈望月〉〈乱〉等を披露。野口兼資、近藤乾三らの指導も受け、宝生流の重厚にして品格の高い芸風を受け継ぎ、昭和43年、芸術選奨文部大臣新人賞、57年〈大原御幸〉で芸術祭大賞を受賞。平成3年、重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)に認定された。その後、足を痛め、平成10年以降は仕舞・舞囃子を除き、能を舞うことはなかった。兄は俳人の松本たかし。昭和57年、観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成10年、早稲田大学芸術功労者賞を受賞。日本能楽会会員(昭和40年以来)。〔宝

生」平成15年6月号、「能楽タイムズ」同3月号、「観世」同4月号に追悼・訃報記事。

●分林保三氏

シテ方観世流。2月23日、心不全のため逝去。享年94。明治42年1月4日京都に生まれる。観世元義、杉浦友雪に師事。大正7年(草子洗小町)の子方で初舞台。その後(石橋)道成寺(卒都婆小町)(鷗鷲小町)等を披露。能楽協会京都支部常議員・常任理事、京都観世会常務理事等を歴任。日本能楽会会員(昭和50年以來)。「能楽タイムズ」平成15年4月号に、「観世」同5月号に訃報・追悼記事。

●當山興道氏

シテ方宝生流。2月25日、他臓器疾患のため逝去。享年70。昭和8年8月17日、當山俊道の長男として東京に生まれる。十八世宝生九郎、十九世宝生英雄に師事。昭和28年(鞍馬天狗)の花見稚児で初舞台。昭和32年(経政)で初シテ。その後、(乱)(道成寺)等を披露。日本能楽会会員(昭和53年以來)。「能楽タイムズ」平成15年5月号、「宝生」同8月号に訃報・追悼記事。

●金井 章氏

シテ方宝生流。3月4日、肺線維症のため逝去。享年81。大正11年1月30日、東京生まれ。十七世宝生九郎、近藤乾三に師事。昭和9年仕舞(岩船)で初舞台。その後、(石橋)道成寺(乱・和合)(望月)等を披露。昭和27年能楽協会賞を仕舞(雲雀山)で受賞。年12月、第一回国立能楽堂研究公演で廃

絶曲(武文)の復曲にシテとして尽力した。日本能楽会会員(昭和40年以來)。「能楽タイムズ」平成15年4月号、「宝生」同7月号に訃報・追悼記事。

●大喜多信明氏

シテ方観世流。3月27日、リンパ腫のため逝去。享年71。昭和7年2月、大西新三郎の次男、大西信秀(大喜多姓を継承)の長男として大阪に生まれる。大西信久に師事。日本能楽会会員(昭和33年以來)。「観世」平成15年9月号に追悼記事。

●喜多節世氏

シテ方喜多流。4月9日、脳内出血のため東京杉並区久我山の自宅で逝去。享年76。大正15年8月31日、喜多実の次男として東京に生まれる。父および十四世喜多六平太に師事。(西王母)で初舞台。その後、(道成寺)(翁)(望月)等を披露。第一回(昭和29年)・第二回(昭和31年)の渡欧能楽団に参加。昭和39年、ニューヨーク高等演劇研究所で指導。昭和50年、親善能楽団の団長として渡米するなど、海外公演にも尽力した。日本能楽会会員(昭和40年以來)。「能楽タイムズ」平成15年5月号、「観世」同6月号に訃報記事。

●生一左兵衛氏

本名・泰知。シテ方観世流。6月8日、肺気腫のため枚方市の病院で逝去。享年69。昭和8年12月2日、生一泰秀の長男として生まれる。父および十二世林喜右衛門に師事。昭和14年(隅田川)の子方で初舞台。(経正)で初シテ。その後(乱)

〔道成寺〕等を披演。平成6年、家名の左兵衛(十三代目)を襲名。日本能楽协会会员(昭和50年以来)。「能楽タイムズ」平成15年7月号、「観世」同9月号に計報・追悼記事。

●住駒昭弘氏

前姓・幸。小鼓方幸流。6月19日、大腸ガンのため都内の病院で逝去。享年69。昭和9年2月4日、住駒陽介の長男として金沢に生まれる。昭和26年、幸祥光に入門。(翁・頭取)〔道成寺〕(卒都婆小町)〔木賊〕〔求塚〕〔定家〕等を披演。能楽春秋会同人として活躍。東京藝術大学講師・国立能楽堂養成課講師を歴任。日本能楽协会会员(昭和50年以来)。「宝生」平成15年8月号、「能楽タイムズ」同9月号に計報記事。

●三宅晟介氏

能楽写真家。8月14日逝去。享年83。「能楽タイムズ」平成15年11月号に計報記事。

●飯島佐之六氏

本名・忠。大鼓方葛野流。9月6日、大腸ガンのため金沢市内の病院で逝去。享年59。昭和19年1月10日、八世飯島六之佐の長男として金沢に生まれる。父および瀬尾乃武に師事。昭和29年囃子(唐船)で初舞台。その後、(石橋・連獅子)〔望月〕(道成寺)〔安宅・延年〕(卒都婆小町)等を披演。日本能楽协会会员(昭和61年以来)。「能楽タイムズ」〔宝生〕平成15年10月号に計報記事。

●中西 通氏

能楽資料館館長。9月12日、呼吸器不全のため逝去。享年

70。昭和7年、観世流師範中西幸一の三男として篠山町に生まれる。昭和44年5月、丹波古陶館、同51年能楽資料館を開館。同館の経営ほか、丹波篠山町文化財審議委員会委員長等を勤める。毎春・秋に開かれる丹波篠山能の運営に尽力された。芸術雑誌「紫明」を創刊。著書に「古丹波」(芸艸堂)〔能のおもて〕(玉川大学出版部)〔能面〕(同上)等がある。「能楽タイムズ」〔宝生〕平成15年10月号に計報記事。

●鈴木能仁氏

能面作家。11月5日逝去。享年75。能仁会を主宰。神戸をはじめ関西を中心に活動した。イギリスの大英博物館をはじめ海外の博物館・美術館へ能面を寄贈した。「能楽タイムズ」平成15年12月号に計報記事。

【平成16年】

●大藏彌(右衛門)氏

狂言方大藏流。1月6日、心不全のため逝去。享年91。明治45年1月19日、善竹(茂山)彌五郎の次男として大阪に生まれる。父および祖父の二世茂山忠三郎良豊に師事。大正6年(朝猿)で初舞台。昭和3年、茂山吉次郎を名乗り、9年(三番三)、12年(釣狐)を披演。昭和16年、二十二世大藏彌太郎虎年の外孫・秦野弘の娘と結婚、大藏家に入籍。大藏彌太郎を名乗り、同17年、二十四世大藏流宗家を継承した。昭和21年(松竹風流)を上演。その後、(花子)〔狸腹鼓〕等を披演。昭和55年、虎智を名乗る。昭和42年、スウェーデン国よりカ

ネーション勲章、芸術祭優秀賞(昭和47年度・53年度)、芸術祭大賞(昭和56年度)等を受賞。日本能楽会会員(昭和40年以來)。「能楽タイムズ」「観世」平成16年2月号に計報・追悼記事。

●河村信重氏

シテ方観世流。1月10日、食道ガンのため逝去。享年46。

昭和32年9月3日、河村禎二の次男として京都に生まれる。

山本勝一に師事。昭和35年、仕舞(老松)で初舞台。その後

〔石橋〕(狸々乱)(安宅)(望月)等を披演。新作能の創作に意欲的に取り組み、(関白一条教房(平成11年)、(日輪月輪(平成12年)、(智辯尊女)(平成14年)を初演した。京都造形芸術

大学非常勤講師等を歴任。日本能楽会会員(平成13年以來)。「能楽タイムズ」平成16年2月号に計報、「観世」同3月号に追悼記事。

●堀越善太郎氏

東海大学教授。楽劇評論家。1月25日逝去。享年67。東海大学「櫻能」の運営にも尽力。教鞭を取るかわら評論分野で活躍した。著書に「能・歌舞伎への招待」(東海大学出版

会、昭和57年)。「能楽タイムズ」平成16年3月号に計報記事。

●大島久見氏

シテ方喜多流。2月3日、肺炎のため逝去。享年89。大正4年1月23日、大島壽太郎の三男として福山市に生まれる。

十四世喜多六平太、喜多実(師事。大正7年、仕舞(狸々)で初舞台。昭和22年(翁)、同27年(道成寺)を披き、その後、

(望月)(石橋)(求塚)(伯母捨)等を披演。昭和57年、広島文化賞を受賞。定例鑑賞能(能楽教室)を開催、中国四国地方では唯一の本格的な能楽堂を建設し、能楽の普及と振興に努めた。日本能楽会会員(昭和42年以來)。「観世」「能楽タイムズ」平成16年3月号に計報記事。

●野村登美子氏

野村萬(七世万蔵)夫人。万之丞(八世万蔵)・与十郎(九世万蔵)の母。2月17日、胃ガンのため逝去。「能楽タイムズ」平成16年4月号、「観世」同5月号に計報記事。

●橋岡久馬氏

シテ方観世流。3月19日、肺炎のため逝去。享年80。大正12年8月13日、初世橋岡久太郎の長男として東京に生まれる。父に師事。昭和40年には政府留学生として渡仏。独自の芸風

で知られ、根強い人気があった。新作活動にも積極的で、多田富雄作(無明の井)(平成3年)、(望恨歌)(平成5年)を作

曲・作舞・初演した。海外公演も多く、スウェーデン王国演劇最高勲章を受賞。大阪文化祭大賞等も受賞。著書に「西暦

一九六七年海外能開演之記」がある。日本能楽会会員(昭和42年以來)。多田富雄・文、森田拾史郎・写真「アポロンに

してディオニソス橋岡久馬の能」(アートダイジェスト・平成12)は能楽界の鬼才といわれた橋岡久馬の風姿と芸を伝えている。「能楽タイムズ」平成16年5月号、「観世」平成16年

5月号に計報記事。

●井上八千代氏

本名・片山愛子。京舞井上流四世。3月19日、脳梗塞のため逝去。享年98。シテ方観世流の片山九郎衛門、片山慶次郎、杉浦元三郎の母。重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)。「能楽タイムズ」平成16年5月号に計報記事。

●前川光隆司

太鼓方金春流。5月20日、急性心不全のため逝去。享年89。大正4年生まれ。前川宗閣の養嗣子。父および金春惣右衛門に師事。日本能楽会会員(昭和40年以來)。「観世」平成16年7月号に計報記事。

●田邊竹生氏

シテ方観世流。6月6日、肺ガンのため逝去。享年79。大正14年2月9日、田邊福太郎の長男として生まれる。観世元昭および嶋澤啓次に師事。日本能楽会会員(昭和50年以來)。「能楽タイムズ」平成16年7月号、「観世」同8月号に計報記事。

●野村万之丞氏

本名・耕介。狂言方和泉流。6月10日、神経内分泌ガンのため東京都内の病院で逝去。享年44。昭和34年8月9日、野村萬の長男として東京に生まれる。祖父六世万蔵および父に師事。平成7年に五世万之丞を襲名。新作・創作活動を積極的に展開し、落語狂言(死神)(平成10年度芸術優秀賞受賞)、お伽狂言(白雪姫)(赤頭巾)(平成12年度児童福祉文化賞受賞)、新生作(えにし祭り)等、怪談狂言(牡丹灯笼)、女狂言(うわの空)等の構成・演出をした。古代・中世の芸能の復活にも

取り組み、「大田楽・日枝赤坂」の構成・演出で芸術祭賞受賞(平成5年)、他に「阿国歌舞伎」等の復元上演、長野パハリンピック閉会式の演出、NHK大河ドラマの芸能考証、聖徳太子の時代の古代芸能を復活させた「真伎楽」や、マスクロードプロジェクトの立ちあげなど、国内外での仕事も多く、織部賞(平成9年)、フランス政府より芸術文化勲章シユバリエを受章(平成13年)。平成17年1月八世万蔵を追贈。著書に「マスクロード幻の伎楽再現の旅」(NHK出版)ほか。京都造形芸術大学専任教授・国士館大学客員教授・早稲田大学非常勤講師、日中友好協会参与等を歴任。日本能楽会会員(平成13年以來)。没後、伊藤美路「大きく、ゆっくり、遠くを見る」野村万之丞作品 写真集 萬歳楽(日本カメラ社、平成16年)が上梓された。「能楽タイムズ」平成16年7月号、「観世」同8月号に計報記事。

●山辺知行氏

染織研究家。10月1日、肺炎のため逝去。享年97。染織美術研究の第一人者で、東京国立博物館染織室長・遠山記念館付属美術館長等を歴任。雑誌「観世」の表紙が能装束の文様で飾られた昭和32年1月号から平成14年7月号まで、三十六年近く解説を執筆した。「観世」平成16年11月号に計報記事。

●一噌幸政氏

笛方一噌流。12月29日、肝硬変のため東京都八王子市の病院で逝去。享年75。昭和4年1月23日、一噌操の長男として東京に生まれる。祖父一噌又六郎および一噌鏝二、藤田大五

181 能界展望(平成15年・16年)

郎に師事。昭和15年(鞍馬天狗)で初舞台。その後(翁)(石橋)(道成寺)などを披演。芸術祭奨励賞(昭和40年)、観世寿夫記念法政大学能楽賞(同59年)、モービル音楽賞(平成5年)など受賞多数。東京藝術大学非常勤講師等を歴任し、後進の指導にも尽力された。日本能楽会会員(昭和47年以來)。「能楽タイムズ」平成17年2月号に訃報記事。